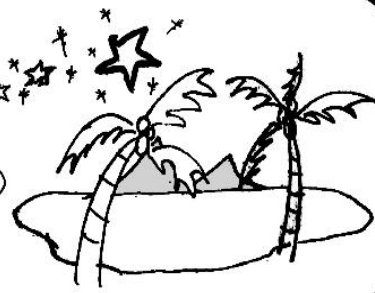


# シラチャ校だより

泰日協会学校  
シラチャ校

2 11 09



## 「シラチャ校運動会の幕開け・・・」

運動会まで、一週間と迫ってきました。子どもたちも、毎日のように自分が出る競技や演技の練習にがんばっています。自宅に持ち帰る体操服も汗まみれ、泥だらけになっているのではないのでしょうか。

シラチャ校が開校して、すべての行事が「一」から創られていきます。来週開催される運動会も記念すべき「第一回」となる訳です。この第一回の立ち上げにあたり、教職員一同以上に、子どもたちも最高のパフォーマンスをするように、日々がんばっています。しかし、よく考えてみると、どうしてこの運動会は、盛大に行っている学校が多いのでしょうか。そして続いているのでしょうか。歴史的な背景を少しのぞいてみたいと思います。

日本で最初の運動会は、1874年3月21日海軍兵学校で英語教師のイギリス人、フレデリック・ウィリアム・ストレンジの指導によっておこなわれた競闘遊戯会であるといわれています。しかし、それは単発的なイベントで、普及するきっかけとなったのは、1878年6月1日に札幌農学校で開催された遊戯会であるとされています。そこから、札幌市内の小、中学校に急速に広がって行ったようです。また、初代文部大臣、森有礼が体育教育に有効と判断し、全国の小中学校で運動会を催すよう訓令を発しました。これが、全国的に行うようになった最も大きなきっかけだと思われます。しかし、当時は教育制度が定まったばかりで、運動場すら整備されていない時代でしたので、出された学校側は多いに困惑しました。そこで、いくつかの学校が話し合い、合同で神社や寺の境内をかりて運動会を行うようになったのです。そうすると、生徒だけで競争するわけにはいかないのに、氏子や檀家も参加できるような競技を考える必要があります。食菓（パン食い）競走、大玉転がしや竹馬競走ができたといわれています。このことから考えると、明治時代に作られた運動会は、国家が最初から明確なたちを指示して、それに従って作られたものではないように思います。兵式体操を重視する国家の教育政策と、明治以前から受け継がれてきた伝統的な遊戯が複雑に混交されて、全国に普及して行ったようです。現在も行われている運動会は、その時代とは違う運動会ですが、当時の色を残して現在まで受け継がれていることが、不思議に思われます。

さて、以上は我々が見たことのない運動会の歴史です。そして、これからシラチャ校の運動会の歴史が刻まれていきます。近年の運動会では、勝敗のはっきりする種目はやめて、誰もが楽しめる種目にするという主張があります。徒競走をやらない学校が増えていたり、やったとしても、手をつないでゴールする手法をとっていたりする学校もあるようです。「いつも負けている子どもがかたいそうだ。勝敗がわかるのは差別だ。」という考えが根底にあるようです。そのことを否定するつもりは有りません。しかし、今回立ち上げるにあたり、「競争することにも大きな価値がある」という思いでいます。それは、勝つ喜びや負ける悔しさを体験し、勝敗が決まる厳しさを通して、より新たな世界に挑戦する姿勢を身につけることへ発展します。大切なことは、ただやみくもに競争させるのではなく、誰にでも勝てるチャンスがある内容を工夫した運動会にすることだと思います。いつも勝つ人間と負ける人間が決まっているのではなく、全力を尽くす中で、がんばれば自分や自分たちのチームが勝てる。そのような運動会にしたいと思っています。日本人学校として日本の運動会の歴史を大切にしながらも、一番は今いる子どもたちによりよい経験になるように、関わる人みんなが第一回運動会を創り上げて行きたいと考えています。そして、「シラチャ校運動会が子どもたちを大きく成長させる」という歴史を刻んで欲しいと思います。

(文責 成合弘太郎)



第一回全体練習風景 2009年10月16日